第12号

リラのいえ

2014年1月発行

思いと願い

認定特定非営利活動法人スマイルオブキッズ　理事長　田川 尚登

「少しでも多くの病気や障がいがある子どもたちと家族を支援したい」。そんなミッションで始まったスマイル・オブ・キッズの活動が昨年で10年、滞在施設「リラのいえ」が開設5周年を迎えました。皆様に支えられてここまで来られたことに感謝申し上げます。

病気や障がいがある子どもたちの医療環境もこの10年で少しずつ良い方向へ進んでいると思います。また大震災を経験したことで、弱者をいたわる思いやりの気持ちが随所に表れてきているように思います。

しかし、医療の進歩をもってしても追いつけない難病や治療方法が解明されていない病気がたくさんあるのも事実です。この世に生を受けた命が短い時間で消えてしまっている現実もあります。

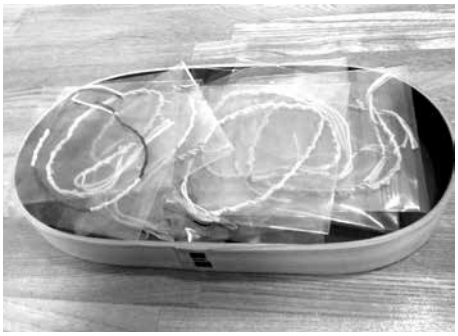
ただ一瞬でもこの世に生まれた命が楽しい時間を過ごせたら、この世の素晴らしい思い、楽しかった時間をあの世へ持っていくことができると考えています。そんな願いを昨年、多額の遺贈を託してくださった石川好枝さんも考えていたのではと思います。

名称はホスピスというのでしょうか。病院と障がい児施設で多くの子どもたちの最後を看取った経験から、「看取りの時間をゆったりと持つことができる、余命を楽しく過ごせる場が必要だ」という願いを持たれたのでは、と思います。今年から石川さんの思いを少しずつではありますが、ゆっくりと形にしていきたいと思います。

昨年末、市内戸塚区の平戸中学校の生徒さんが入院している子どもたちの回復を願って手作りのミサンガ（手首に巻くお守り）をたくさん用意しくださいました。それを、「リラのいえ」利用者の家族に身につけてほしいと、担当の先生が持参してくださいました。入院している子どもの家族に何ともありがたいパワーを与えているのだと生徒さんと先生の人を思いやる気持ちに深く感銘しました。

思いや願いは、言霊となって広がっていくと万葉の昔から信じられています。そんな思いや願いが、現実に力となってほしいと私たちも願っています。

病気や障がいがある子どもと家族がより良い時間が過ごせるよう、私たちも支援を続けていきます。



生徒が願いを込めてつくったミサンガ

あたたかさのあるところ

「リラのいえ」は季節の草花に囲まれてたたずんでいます。子どものいる病院から少し離れていて、でもさほど遠くはなく、帰ってくるお父さんお母さんを迎えてくれます。

「リラのいえ」がなかったらば、遠くから病院にやってきて、しばらく治療が必要なとき、家族はどうしたらよいのでしょうか。ホテルに泊まったり、アパートを短期契約したりと、費用も労力も大変です。子どもの病気のことで気持ちが一杯のときに、残りのエネルギーで歩き回らなければなりません。

「リラのいえ」にはアパートと違って、ねぎらいの声がかわされています。前身の横浜ファミリーハウスが、個人の家から出発したせいかもしれません。子どもたちが独立した後に、部屋を患者さんご家族に提供したことに始まります。共用スペース、語らいのスペースも「リラのいえ」ならではの場で、アパートにはないことでしょう。そこで他のご家族と話してもいいし、部屋で休んでもよし。病院にいるあいだは、ご家族にとってはおそらく、時間の流れにとまどうことも多いことでしょう。病院の決まり事に早く慣れたい、と気も張っていることでしょう。そんなこんなの諸々の病院生活をどうしたらいいの、という情報交換もさしせまった事になります。でも、それよりも子どもの病気という心の中の重荷を、聞いてもらえる人がいると少しでも軽くなることでしょう。それも、同じ重荷を持っている人に聞いてもらえると、もっと明日が軽くなりそうだと。そのような配慮が開設者にあったことと思われます。

「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」という私の好きなおすすめのことばがあります。いつの時代でもどこにあっても変わらない人間の社会での在り方かと思います。うれしいときには周りの人といっしょに喜ぶと、喜びが倍になり、悲しいときに周りの人たちといっしょにいると、たとえ話さなくても悲しみが半減するのだと思います。そして、力が与えられるのではないでしょうか。

「リラのいえ」にはあたたかい空気が流れています。

神奈川県立病院機構・神奈川県立こども医療センター　病院長　山下 純正

「リラのいえ」への感謝

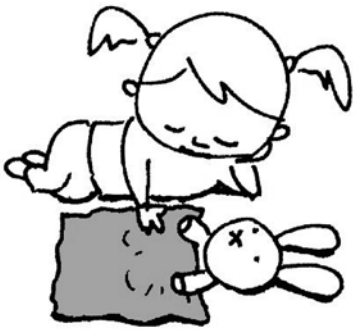
はじめて「リラのいえ」の存在を知ったのは、神奈川県立６病院が独立行政法人になる前の県立病院時代に、私が病院課という県立病院全体を所管する部署にいたときでした。「リラのいえ」設立のためのチャリティーコンサートがあることを当時のこども医療センターの看護局長にお聞きし、チケットを購入したのです。

私は、比較的長く神奈川県立がんセンターの無菌室に勤務していましたので、その中にはやはり県外から治療を受けたいと、家族で神奈川に来て治療をしていた患者さんもいました。そのため、私も家族のための滞在施設の必要性を常々感じていました。無菌室で治療を受けている患者さんは、成人でお子さんもいる方が多くいましたが、一人家族と離れての治療に耐えられず、「家族にそばにいてほしい」と訴える方が多くいました。そのご家族の方が近くのアパートを借り毎日面会に来て、患者さんを励ましていました。

成人の患者さんでさえ、面会のガラス越しに涙を浮べ「情けない、早く治したい、ここから出たい」と何度も繰り返していたのです。これが幼いお子さんの場合は、お子さん自身はもちろん、ご家族もさぞつらい期間を過ごすことになると思います。

患者さんにとって医療者の支えは微々たるもので、一番はご家族の支援であることは言うまでもありません。そのために看護師は、ご家族がさまざまな不安や心配を解消し患者さんに笑顔で接することができるように支援します。

ご家族にとって、「リラのいえ」の皆様の存在はかけがえのないものになっていると思います。特にこども医療センターに入院中のお子さんの病状は、複雑で重症な方が多いです。ご家族は、病院で目一杯神経を使ってお子さんのそばに寄り添い、疲れて帰ったときに「リラのいえ」のような温かい人々や場所があることは本当に救いになると思っています。滞在された方々の手記からもそのことが感じられます。



可能であれば、全部のご家族が「リラのいえ」に立ち寄ることができれば、ご家族はどんなにか不安が軽減されて、本来の元気と笑顔を取り戻すことができるのではないかと思います。

人は人によって支えられて、生活ができていることを「リラのいえ」で実感します。その大きな支えを実践していただいている「リラのいえ」に携わる皆様に本当に感謝いたします。

神奈川県立こども医療センター　看護局長　長場 直子

あきらめない小児がん治療

2013年2月、こども医療センターが全国15カ所の「小児がん拠点病院」の1つに指定されました。総長以下、病院を挙げて指定獲得に取り組んだことが実を結びました。滞在施設の有無は重要な評価ポイントであり、「リラのいえ」の存在が強力なアピールになりました。もっとも、当初はいろいろ予算がつくものと期待しましたが、そう甘くはなく、今のところ仕事量が増えたことだけ実感しています。

それはさておき、拠点病院指定に乗じて私は「あきらめない小児がん治療」をひそかに掲げました。

私は小児がんに関するホームページを立ち上げており、全国の親御さんが悩んだ末にそれを見てメールをくださいます。主治医の了解が必要なセカンドオピニオンは敷居が高いですが、メールなら気軽に相談できます。その中で「今の病院では『もうあきらめましょう』と言われてしまいました」という相談が何件もありました。

KCMC（神奈川県立こども医療センター）ならまだあきらめません。その言葉に一縷（いちる）の望みを賭けて、九州や関西などからKCMCに来てくれました。こちらで治療して無事寛解（かんかい）した子もいれば、まだ再発を繰り返している子もいます。みんな、本当に健気に病気と闘っています。

小児がんそのものの数は少なく、日本で年間1500人ほどです。大人では胃がんだけで年間12万人かかるのと比べると本当に少ない。また最近は化学療法の発達で治癒する子が増え、「不治の病」とされたのは過去の話です。

しかしその中で、進行してしまったがん、転移してしまったがんなどは、やはり手強い。例えば子どもの肝臓がんである肝芽腫は日本で年間40人程度です。このうち転移してしまうのは数人。でもこの数人の親御さんはきっと夜も眠れない日を送っているのでしょう。だから転移したからもうダメ、とあきらめたくない。そんな思いがあります。

親御さんのメールにはたいてい「宿泊施設があるのでしょうか」とあります。お返事に自信たっぷりに「『リラのいえ』があります」と書けることがうれしい限りです。

医療者だけでは決して救えない、子どもの命です。これからも頼りにしています。

神奈川県立こども医療センター　外科　北河 徳彦

「リラのいえ」ってこんなとこ

2013年4月に人事異動により県立こども医療センターに赴任してまいりました。新任職員対象のオリエンテーションに続いて、「リラのいえ」を訪問させていただく機会がありとても印象に残っています。

よく手入れされた色鮮やかな花壇を眺めながら玄関口から入ると、落ち着いた木のぬくもりがあり、各部屋や食堂などの共用スペースも清潔感や心のやすらぎが感じられます。そして、なによりも明るく楽しい雰囲気がごく自然に漂っているのです。

毎月の「リラのいえ」との連絡会議の場においては、現況や課題、スケジュールなどについて話し合います。そうした中、開設5周年にあたるということで、記念式典及びコンサートが当センターの総合待合で開催されるとのことでした。

ただ、当日が近づいても準備等の具体的な話はなく、3日くらい前になって、ようやくチラシが出来上がり当センター内にも掲示してほしいと連絡がありました。随分、のんびりしたペースでしたので、お手伝いすることにしました。そこで、会場の設営や準備、式典の進行といったことを尋ねたところ、大体のところは決まっており、ボランティアさんが手伝いに来てくれる予定になっているので、あまり心配はないであろうというお返事でした。そうは言われても、設置するイスや机の個数や受付の手順などの確認を促すという出しゃばり過ぎたことをしてしまいました。

しかし、そんな私の心配は全く無用なものとなったのです。当日、会場の準備に集まってくださったボランティアのみなさんはとても手際良く、予定時間よりも余裕を持って作業を終えることができました。

そして、式典が始まり、来賓の方々による親近感あふれるあいさつ、ボランティアや保育士の皆さんの紹介と進み、ヴォーカルグループによるコンサートが始まります。患者さんであるお子さんが、会場のあちこちで曲に合わせて手拍子したり体を動かしたりしながら楽しんでいる光景は、見ている私までも楽しい気持ちにさせるものでした。

実は、「リラのいえ」には、草刈りや窓拭きを引き受けてくださる方、洗剤などの日用品を寄附してくださる方など、もっと多くのボランティアの方がいらっしゃって、この方々の思いや善意が大きな支えになっていることを知りました。そして、こうした熱い思いが、患者さんのご家族から寄せられる数多くの感謝の声に結びついているのでしょう。

このような結びつきがもっと広がって、笑顔や歓声が絶えず満ちあふれている、そんな滞在施設となるような取り組みに、一事務職員も協力してまいりたいと考えています。

神奈川県立こども医療センター　事務局総務課　平木 克明

「リラのいえ」での有意義な時間

「リラのいえ」とかながわ県民活動サポートセンターは、平成 19 ～ 23 年度のかながわボランタリー活動推進基金 21 協働事業負担金の縁でつながりが生まれました。

そのご縁から、平成 25 年夏に、当センターが企画した若年者 1 日ボランティア体験事業にご協力をいただき、延べ 15 名に上るボランティアの受け入れをお願いしました。

この期間、大変お忙しいにもかかわらず、運営スタッフの皆様から参加者に対して、施設の説明や、利用に関する一連の流れの体験、館内清掃、利用者のお世話に関する指導のほか、こども医療センター見学の機会まで設けていただきました。

参加者からは、「活動にかける熱意を感じ、さまざまなことを学んだ」「大変意義の有る時間を過ごせた」「これからの生き方が広がった」といった充実感あふれる感想をいただきました。このような有意義な体験の場を提供できたのは「リラのいえ」関係者の皆様のおかげです。深く感謝申し上げます。

さて、私はこの体験ボランティアへの帯同という形で訪問させていただきましたが、実は、小学生の子どもの親という立場から、かねてから「リラのいえ」の取り組みに共感を覚え、ぜひ、機会があればおじゃましたいと考えておりました。

そして、「リラのいえ」訪問の際の感想ですが、館内がとてもきれい・清潔、運営スタッフさんが生き生きとしている、館内全体が温かく、落ち着けるムードといった明るい印象ばかりであったと記憶しています。利用者さんの背景を考えると独特の重い雰囲気があるのかと思っていましたが、そんなムードを感じなかったのは良い意味で意外でした。

利用者の声を綴ったノートも拝見しました。そこにはやはり、重病の子どもを抱えた親御さんの現実が綴られ、悲痛な思いを抱きます。しかしながら、スタッフへの感謝のことばも多く綴られており、闘病する親子が「リラのいえ」にいかに支えられているのかがわかります。この館内の温かいムードは、スタッフの心遣いによるものと実感しました。

「リラのいえ」は、その築かれた大きな支援の輪から、多くの支援者獲得をめざし活動する他のボランタリー団体の目標となる存在だと思います。ここは、人を思う優しさにあふれた場所とお聞きしますが、それを味わえた貴重な時間でした。

ありがとうございました。

神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター
ボランタリー活動サポート課　角田 重樹

「リラのいえ」と記者たち

年の瀬、「リラのいえ」のクリスマス会にお招きいただき、初めて馬頭琴の演奏を聴きました。スタッフや利用者の皆様の手作り料理をいただきながら、大陸をゆく風のような悠然とした音色を聴いていると、ここへ来るまでの外の寒さもすっかり忘れ、温かい気持ちになりました。

演奏者の方から、モンゴル人の師匠のお子さんが神奈川県立こども医療センターで手術を受け、その恩返しでご縁ができたとの話を伺いました。子どもの命への思いが国境を超え、こうして人と人とをつないでいることを知りました。

佐伯トシコさんにセンターを案内していただいたのは、その数日後です。大きなクリスマスツリーに飾られた手縫いのぬいぐるみやリースがあちこちにあり、病院のイメージとは違う、明るく温かい空気を醸し出していました。そして、こうした空気が多くの善意でつくられていることに感銘を受けました。

小さな命とお別れをする部屋。お父さん、家族でもガラス越しでしか会えないことがあるクリーン病棟。手術室へ向かう廊下に書かれたアニメのキャラクター。悲しい現実は、その場所を見ただけで伝わってきます。佐伯さんが教えてくださいました。「ICU に入っていると、赤ちゃんもストレスで円形脱毛症になることがあるんです。それを見るお母さんたちの、やるせなさといったら……」

大人でも大変な治療や手術のつらさを少しでも和らげてあげたい。家族の不安に寄り添いたい。そんな方々の思いが支えるセンターの尊さを知るとともに、こうした場所はもっと増やすべきではないかと痛感しました。

私は支局長として横浜へ来て 1 年足らずですが、「リラのいえ」と毎日新聞とのお付き合いは短くありません。支局員は順次本社に転勤していきますが、その後任、さらにその後任とバトンを託し、取材しています。上司に指示されたわけでもなく、皆様との出会いに若い記者たちが教えられ、「多くの人に伝えなければ」との思いを強くするからにほかなりません。開設 5 周年の 2013 年は「リラの物語」を連載させていただきました。ご協力、本当にありがとうございました。

記者の使命は現状を発信し、より良い社会を築く一助となることです。そして、皆様の温かな輪の片隅に置いていただければ、なおうれしく思います。

馬頭琴は幸せを呼ぶ楽器だそうです。新しい年にたくさんの良いことが「リラのいえ」に運ばれてきますことを、心よりお祈り申し上げます。

毎日新聞　横浜支局長　磯崎 由美

神奈川県から

「行っていらっしゃい」、「おかえりなさい」。朝晩、「リラのいえ」の玄関先で繰り広げられる毎日の光景です。私はこの温かい挨拶で送り出され、迎えられる日々を約４カ月近く続けさせていただきました。

私は妊娠６カ月のとき、突然激しい目まいと吐き気を伴う耳鼻科系神経の炎症による病を発症し、救急車で運ばれ入院。ほぼ同時期に妊娠高血圧による腎臓疾患にもなり、母子ともに危険な状態でさらに転院。そんな私たちを受け入れてくださった先が「こども医療センター」で、予定日より４カ月も早い帝王切開での出産となりました。

生まれた子どもはわずか 400g 程の小さな赤ちゃん。保育器で一生懸命生きようとする息子に、自宅で搾乳し冷凍した母乳を持って毎日面会に行くことくらいしか私にはできません。

しかしながら体調が万全に戻らず、どのように病院に通うか途方にくれていたとき、「リラのいえ」の存在を知りました。８部屋で県外の遠方からのご家族優先ということは承知していましたが、佐伯さんはじめボランティアの方々は、夫が海外に単身赴任の上、目まいが完治していない私の体調を理解してくださり、快く受け入れてくださいました。

駅のホームや階段を歩くと景色が揺れて見え、手すりにつかまりながら歩いていたこの時期、「正直、ありがたい」と、すがるような思いでお世話になることにしました。

生活用品も不自由なく揃っていた上、清潔な室内は入居者がいつも心地良く過ごすことができるように配慮されていました。また、朝、干した洗濯物が病院から戻る時間にはすでに取り込んでくださっているなど、行き届いた心配りもなされ、ダイニングでの食事どきには入居者同志で語り合い、心を通わせることもありました。そんな情景をいつも温かく見守り、寄り添ってくださったボランティアの方々には、ただただ頭が下がる思いです。

今後、息子が元気に成長したら、大きくなった姿を「リラのいえ」の皆様にも報告に来たいと思います。本当にありがとうございました。

福島県から

福島県から来ました。アペール症候群の娘を持つ母です。娘が生まれて、明日で３カ月経ちます。精一杯にがんばっている娘の姿に励まされています。娘は生まれてすぐ、地元のNICUに約３カ月入院。神奈川県に来たときが初めての外出でした。今でも、この現実を受け止められずにいます。手術するのもイヤです。けれど、「リラのいえ」に来て、元気をもらいました。本当に感謝しています。

秋田県から

食道アカラシアの手術を受けに秋田から来ました。娘は３年前から吐いてばかりいて、身体に異常がないからと心身症の診断を受けていました。心療内科でカウンセリングを２年受けていましたが、いっこうに良くならず、体重がどんどん減ったため、秋田の病院で入院をしました。そのときの検査で食道に病気があることが分かりました。

「2年間見つけられなかった病気が、今頃見つかるなんて･･･」と悔しい思いもありましたが、「病気のせいだったのか」と光明も見えました。

横浜へ来て手術が無事成功して、ご飯を食べている姿に思わず涙が出ました。「この子の未来はこれからなんだ」って･･･。今までできなかったことなど少しずつ取り戻していきたいです。

遠方から来た私たちにとって、滞在施設はとっても助かりました。私の話をたくさん聞いていただき、心を軽くしてもらいました。とても居心地の良い我が家でした。感謝しています。ありがとうございました。

県外から

娘は、すべり症の手術のため、こども医療センターに来ました。手術は難しいと聞いていて、結局 11 時間もかかりました。ずっとうつ伏せになって腰の手術をしたため、手術が終わったとき、顔がパンパンに腫れ上がって、泣きながら出てきました。もちろん家族みんな、涙・涙・涙です。手術が無事成功したのが何よりでした。

初めての入院と手術でも、娘はとても頑張りました。小学 1 年生で、私と離れて寝たことがなかったので、今はストレスマックスで周囲に当たり散らしています。早く歩けるようになって退院できるといいなぁ～。

「リラのいえ」とファミリーハウスにお世話になり本当に感謝しています。スタッフの皆様に元気をいただいたおかげで、娘に尽くすことができています。佐伯さん、本当にありがとうございます。実家に帰ってきたみたいに居心地が良かったです。

「利用者のノート」を読み返すたびに涙が止まりません。どうか、皆様が幸せになりますように。

愛知県から

愛知から来ました。「リラのいえ」にお世話になるのは、今回で４回目になります。今回は僧帽弁置換手術のため、８月２日から滞在させていただいています。

８月２日の早朝に愛知を出発し、８：30 に病院到着と同時に入院延期の連絡・・・。「リラのいえ」に電話をして事情を話すと入室予定時刻が早まったにもかかわらず、温かく受け入れてくださいました。そして飛び入りで整膚を施していただき、たまっていた疲れが一気に癒されました。

翌３日には「リラのいえ」で BBQ パーティー！ 佐伯さんには「入院が延びたけど、BBQ 参加のために来たと思えばいいじゃない！」と誘っていただき、うれしかったです。

娘の手術は無事成功。経過も順調なため、術後１週間での退院となりましたが、週１～２回の血液検査、薬の調整のため、長居させていただきました。

術後で感染症予防のため、通院以外はほぼ「リラのいえ」におりましたが、娘はたくさんのおもちゃと、保育士さん、お友達、スタッフさんに囲まれて楽しく過ごすことができました。

「リラのいえ」ではボランティアのスタッフさんとほかの利用者さんのおかげでとても過ごしやすかったです。スタッフさんがお仕事をされていても帰ると手を休め、「お帰りなさい、どうだった？」と声をかけてくださる気遣いが、とてもうれしかったです。

お話をたくさんしてくれて、ときにご飯を一緒に食べてくれたり、買い物に行ったり、子どもを見ていてくれたママさんにも、ありがとうございました。

FROM
ボランティア

「リラのいえ」のスタッフの一員になって

1月9日から「リラのいえ」に伺うようになり、早1年になろうとしています。私が「リラのいえ」にボランティアの一人として参加させていただくようになったのは、県サポートセンターで“病院ボランティア養成講座”を受講したことがきっかけでした。

その講座で講師をしていた上原さんからスマイルオブキッズと「リラのいえ」のお話を聞き、7回目の講座で県立こども医療センターで1日体験をしたのです。

その帰り「リラのいえ」を見学させていただき、説明を伺いました。そして、「性格がアバウトの私にできることがあるのか！？」と不安に思いながらも、ボランティアをスタートしました。

「リラのいえ」は、室内や施設内水回り、共有部分など、いたる所が綺麗に維持されていることに驚きました。先輩のボランティアの方々の努力が伺えました。

利用者さんへのあたたかなまなざしと言葉かけ、とってもステキです。「リラのいえ」の利用者さんといっしょの行事やチャリティーコンサートなども、楽しく感動がいっぱいでした。

夏の“ふれあいコンサート障がいのある子どもと家族のつどい”では、お父さん、お母さん、きょうだい児がお子さんたちとふれあい、音楽に合わせて手をつなぎ、鈴を鳴らし、身体を動かして楽しんでいる姿を見て感動しました。2日間のお手伝いは初めてだったので緊張もしましたが、充実感でいっぱいになりました。

いまだに新人で何をするのも聞いてばかりですが「リラのいえ」のボランティアの一員として少しでもお役に立てたらと思います、よろしくお願いします。

（スタッフ　杉本 邦子）

FROM
ボランティア

ボランティアの機会に感謝

私のようなサラリーマンにとって、定年後の自由な生活は長年の夢であり、しばらくは好きなことをして遊び呆けていました。

ところが人間というのは贅沢にできているのでしょうか、1年もすると、何か物足りないというか、こんな生き方で人生を終えて良いのかと思うようになりました。そのとき、たまたま、藤沢カソリック教会のシスター・キャスリンから「リラのいえ」の話を聞き、早速訪問させていただき、上原さんから詳しい説明を聞き、その場で参加させていただく決心をしました。

ボランティアとして参加申し込みをしてはみたものの、悪友からは「意地悪な“おばちゃん”たちにいびられるぞ～」などと脅かされ、また大半のサラリーマン人生を、中近東等産油国での石油プラントの建設などという、ボランティアとはほど遠い仕事に携わっていたので、はたして自分にできるのかどうか少し（というか非常に）心配していました。

しかしながら「案ずるより産むが易し」でした。意地悪な“おばちゃん”などどこにもおらず、ボランティアの方々は皆優しい淑女であることがすぐに分かりました。そして、今、皆様のお力を借りつつ、今日に至るまで「リラのいえ」でボランティアをさせていただいています。

いまだに口の悪い友人たちは「お前がモップ掛け？？」とからかいますが、人は皆、誰かに喜ばれたいという欲求が刷り込まれているのだと身を持って実感しています。

「リラのいえ」に滞在される方々は、私には計り知れないような精神的・肉体的なつらさや悩みをお持ちと思います。せめて「リラのいえ」に滞在している間は、我が家とは言えないまでも、少しでも心の安らぎを感じて、気持ちよく滞在していただけるように努力していきたいと思います。

このような機会を与えてくださった佐伯さんをはじめ「リラのいえ」の皆様、並びに「リラのいえ」を紹介してくれたシスター・キャスリンに心より感謝します。滞在されている方も、遠慮なく気楽に声をかけてください。人相は悪いですが心は優しいですから・・・。

（スタッフ　白井 良平）

FROM
スチューデント

「リラのいえ」での体験活動から

ファミリーハウスを知ったのは、大学１年生のときに受講した講義でした。それから４年生になり、卒業論文のテーマをどうしようかと考えたとき、まだまだ知らなかったファミリーハウスについて調べたいという思いが大きくなっていきました。

そこで、「リラのいえ」での体験活動を依頼させていただきました。とても急で、さらに４日間という短い期間のお願いでしたが、佐伯さん、上原さんをはじめ、スタッフの皆さんが快く引き受けてくださいました。

秋田県で生まれ育った私にとって、「『リラのいえ』は都会にある」イメージでした。しかし、実際に訪れてみると自然も多く、木をたくさん使ったやさしい雰囲気のお家でした。

プライバシーが守られた空間で、ゆっくりと休める８室の部屋。反対に、部屋にこもりきり、悩みを抱え込んでしまわないように用意された食堂。単なる宿泊スペースではない、細かな心遣いが随所にありました。

また、ボランティアの皆さんの明るく優しい人柄、元気さなどに、利用されている人たちが笑顔になるときもたくさんあり、病児の家族にとって、本当に「第二の我が家」なのだと感じました。

ファミリーハウスという言葉と、その概要くらいしか知らなかった私にとって、「『リラのいえ』は素晴らしい」という以外にありません。病児の家族やそのきょうだい児の支援においても、必要性を感じて積極的に動いておられます。ここに書ききれないほど、たくさんの「第二の我が家」としての役割を担っていると感じます。

私は自分の卒業論文において、ここで学んだこと、そしてそれを踏まえて、自分なりのファミリーハウスの在り方について書いていきたいですし、ファミリーハウスの認知度が高くとは言えない秋田県で、その必要性や意義について何か発信していきたいとも感じます。また、これからもこういったファミリーハウスの活動に、何らかの形で関わっていけたら嬉しく思います。

（秋田大学教育文化学部４年　藤澤 真由伽）

FROM
スチューデント

ボランティアの機会に感謝

「リラのいえ」との出会いは、偶然のようで必然の出来事であったと振り返ればそのように思います。大学３年生の夏をどのように過ごそうか考えているとき、かながわ県民活動サポートセンターのホームページに辿り着き、ボランティア１日体験プログラムに「リラのいえ」がありました。

大学の講義では看護学部ということもあり、医療機関での病棟実習がカリキュラムとして組まれています。これまで多くの患者さんや患児さん、そのご家族の方々と会い、疾患に関することや生活のことなどの話を聴きました。しかし、病院という建物から外に出たときに、どのような表情で、どのような思いを持ち、どのように過ごしているのかは想像もつきませんでした。将来、医療従事者を目指す者として、病院の中だけの患児さんとご家族を看るだけでは、真の看護師になることはできないと考え、「リラのいえ」で多くのことを学び、経験しようと思いました。

ボランティア体験では、掃除や洗濯、書類の準備や整理等をボランティアスタッフの方々に指導を受けながら、毎日充実した時間を過ごしました。普段、目が行き届かないような額縁の上に溜まった埃など、細かい部分にまで気を配り居室を清潔に保つことで、ご家族は少しでも安心して生活できるのだと感じました。また、利用するご家族にとっては、いつでも必ずボランティアスタッフがいることだけでも安心できる場所であり、「行ってらっしゃい」と「お帰りなさい」が聴こえる第二のいえであると思いました。

ボランティア体験をした数日間で、病を抱える子どもたちを支えるご家族に、自分ができることをできるだけのことをするという、「リラのいえ」のおもてなしを学びました。

患者家族の皆様、ボランティアスタッフの皆様、かながわ県民サポートセンターの皆様に、この場をお借りして満腔の敬意と感謝の意を表します。

（慶應義塾大学看護医療学部３年　岡部 卓也）

FROM
インストラクター

タッピングタッチしましょう♪

タッピングタッチをご存知でしょうか？左右交互にトントントントントンとゆったりとしたリズムで、相手の背中などに触れるケアの手法です。15分ほどタッピングタッチを行うと、体も心もホッと楽になっていただけます。まさに「手あて」です。

タッピングタッチは道具もいらず、お金もかからず、誰でもいつでもどこでもできます。してもらうだけでなく、してあげることがすぐに可能な相互性があるのが大きな特徴です。副作用もないので、気軽に楽しく使っていただけます。

私は2013年9月から月に2回、「リラのいえ」でタッピングタッチ・ボランティアをしています。基本的には第2・4火曜日の朝です。「リラのいえ」に宿泊されているほとんどの方は、午前10時から午後10時まで入院中のお子さんに付き添っておられますから、朝9時前から10時までがタッピングタッチ・タイムです。

ご希望の方にタッピングタッチをさせていただき、やり方を簡単にお伝えしています。「フーッと楽になりました。ずっと張り詰めていたから」「体が温まりました。とっても気持ちよかった」「なんだかスッキリしました」「子どもにやってあげたい」「お留守番しているお兄ちゃんにしたらいいかも」などの感想をいただいています。タッピングタッチの後で、いろいろなお話をしてくださる方もいらっしゃいます。

2012年からこども医療センターオレンジクラブ主催のバザーでタッピングタッチ・コーナーをさせていただいています。バザーのとき、車いすに乗った9歳の少年とお母様が来られ、体験した後、この少年が「帰ったら、お母さんにやってあげたい」と言ったその言葉と優しい笑顔が忘れられません。

これまでのボランティアの経験から、タッピングタッチは病気の子どもたちとご家族に寄り添うのにふさわしいケアだと感じています。皆様もタッピングタッチをしてみませんか？

（タッピングタッチ協会認定インストラクター　中田 利恵）

第５回
地域がささえる

FROM
サポーター

「ふれあいコンサート 2013」に参加して

2013 年 8 月 10 日 (土) ～ 11 日 (日) の両日、横浜ラポールシアターにおいて、亀淵友香＆ VOJA ＆ Starlights のコンサートが開催され、初めて参加しました。

とっても暑い日でした。亀淵友香さんグループの歌は初めて聴くものでした。会場いっぱいにのびのびとゆっくり、躍動感あふれる振り付けとともに、声量たっぷりの歌声が響きわたります。「なんてスバラシイ！」優しく体にスーっと入って受け止められるようで、とても癒されました。

出演者と会場の皆様がいっしょになって生の歌声を間近で聴けるのは、とっても幸せですね。プロの皆様が地域を支え、地域の皆様が協力して、支え合い・ふれあいが生まれるのだと感じました。

これからも、いろいろな活動が続くことでしょう。小さな輪が次から次へと大きな輪になることが地域を支えることにつながるのだと思います。

亀淵友香様、関孝弘様のプロの生演奏や歌、トークを身近で見たり聴いたりできることは本当にありがたいと思います。このように素晴らしい行事を企画してくださいます「リラのいえ」の皆様にも感謝いたします。

終演後には、出演者が来場者とともになごやかに交流をしている姿をみてほほえましく、ホットしました。「今日は参加してとっても幸せ！」と思って帰ることができました。次回も楽しみです。そのときは一人でも多くの方がお越しになりますように・・・。

大勢の皆様に伝えるのは、難しいことがたくさんあり、それを知り得た皆様も一歩先に踏み出すにはスゴーク勇気がいります。でもきっと、素晴らしい出会いがあると思います。私もちょっとずつ一歩踏み出していきたいです。

（支援者　沼沢 静江）

FROM
保育士

正しい知識と情報で子どもを守る

2013年11月23日（土）、「リラのいえ」において、元神奈川県立こども医療センター所長（現神奈川県小児保健協会）の後藤彰子先生をお迎えし、『今こどもを取り巻く医療・保健環境は』と題して講演をしていただきました。その中で特に参考になったこととして「母乳の価値」がありましたので、それについての感想を書かせていただきます。

母乳は月齢ごとにその質が変わるだけでなく、赤ちゃんが飲んでいる間にも、飲み始めと飲み終わりで質が変わるそうです。それほどにきめ細かくつくられているので、搾乳後、常温で数時間置いて飲ませても大丈夫とのこと。

また、子どもが母乳を欲しがったときは、いつでも与えてよく、「1歳だから『断乳』」と思う必要はないそうです。そもそも「断乳」という言葉はもはや死語であり、今は「卒乳」というそうで、子どもが欲しがれば3歳まであげても良いというお話に、びっくりしました。

私自身、母乳での子育てで大変な思いをしましたが、その大変さ以上の価値が母乳にあることを改めて知りました。子どもに関わる仕事をする者としては、時代とともに開かれていく正しい知識を学び、随時考え方を修正していくことが大切だと再認識しました。また、ときに応じて、正しい情報を伝える準備を、常に自分の中にしておくことの大切さも感じました。

そのほかにも、予防接種や母子手帳の大切さ、これから求められる医療の姿など、内容の濃い講演会でした。その会には「リラのいえ」に滞在中のお母様も参加されており、その方からは普段聞くことができない子育ての悩みも聞くことができました。

私たち大人が正しい知識と情報をもとに、子どもを見守っていくためにも、このように生活に密着した研修は本当にありがたいと思います。お忙しい中、このようにして親身に関わってくださる後藤先生の惜しみない優しさに感謝します。

（保育士　五郡 ほなみ）

2013年11月2日～3日

第14回JHHHネットワーク会議に参加して

全国のハウス運営者の情報交換を目的として、1997 年より活動しているJHHH（日本ホスピタル・ホスピタリティー・ハウス）ネットワーク会議。今年は、沖縄県那覇市と南風原町の境にある県立南部病院・こども医療センターで開催されました。
（参加17団体96名）

■滞在施設見学・講演会

初日は滞在施設「がじゅまるの家」を見学。

翌日は、講演から始まりました。テーマは『行政人、医療人、県民、親の会、島民の大きな輪～ゆいまーるでできたみんなの宿「がじゅまるの家」～』。

小児がん拠点病院などの報告など、こども医療センターと「がじゅまるの家」ができるまでの道のりと多くの困難や問題点、支えとなったものや関わった方々の思いなど、深く切り込んだお話は大変興味深いものでした。

■分科会

「ハウスの広報」「感染症対策」「イギリス・ドイツの子どもホスピス視察報告」などをテーマにした分科会も開催されました。その中の１つ、「ハウスを運営するために大切にしていること」では、医療と利用者を取り巻く環境の変化、そして運営者の世代交代の問題などが話し合われました。

「リラのいえ」もスタートして５年。学ぶべきところがたくさんあります。同じ滞在施設を運営していらっしゃる方々の悩みと情熱などを学べた充実の２日間でした。

（田川 尚登・萱畑 佳代子）

関孝弘氏、グランド・ピアノを贈呈

スマイルオブキッズ副理事長でもあるピアニスト関孝弘さんとマリアンジェラさんより、神奈川県立こども医療センター重症心身障害児施設にグランド・ピアノが寄付されました。その背景をお伝えします。

イタリアでの反響

そもそもの発端は、関さんご夫妻の提唱のもと、2年ほど前に始まった、「医療と音楽に関する研究※」から。関さんご夫妻は、この研究がより良い環境で進むようにと、一昨年の東京文化会館大ホールのリサイタルとイタリアでのコンサートで寄付を募ってきました。

イタリアではガン撲滅協会「デ・ヴィンチェンツィ」が「命のピアノ」運動として位置づけるなど、大きな支援をいただきました。昨夏のイタリアでの最終演奏会では、会長である著名な医師ウーゴ・フォルコ氏より盾が授与され、現地メディアにも取り上げられて、大きな反響を呼びました。

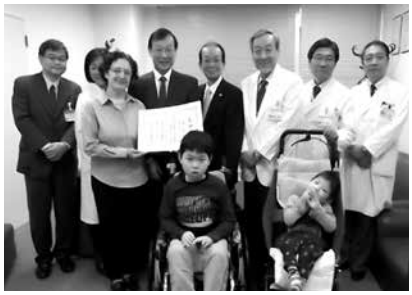
ガン撲滅協会「デ・ヴィンチェンツィ」から授与された「命のピアノ」の盾

※医療と音楽に関する研究
さまざまな視点から、音楽が病気の子どもたちにどのような働きを示すか、医学的にきちんと数値として証明していくことをめざすプロジェクト。その途中結果が、昨年9月、宇都宮の学会で発表された。

日本とイタリアの架け橋に

こうして、昨年 10 月 26 日、日伊の温かな心のこもったグランド・ピアノが重症心身障害児施設に寄贈され、関孝弘氏によるミニ・コンサートが同時に開催されました。この模様は毎日新聞、神奈川新聞にも記事として取り上げられましたので、お読みになった方も多いかと思います。

長年にわたり子ども医療に大きな貢献を果たしている関孝弘氏ご夫妻に対し、当日は神奈川県立こども医療センター総長康井氏より感謝状が、12 月 18 日には県立病院機構理事長大崎氏より神奈川県黒岩知事の感謝状が授与されました。



2012年12月の東京文化会館大ホールのリサイタル

神奈川県黒岩知事からの感謝状

黒岩知事からの感謝状を神奈川県立病院機構理事長の大崎氏が授与

寄贈されたグランド・ピアノの前で

ミニ・コンサート

認定特定非営利活動法人スマイルオブキッズの活動へのご支援、ありがとうございました

2013 年 7 月 1 日から 12 月 31 日まで
敬称を略させていただきます。記入漏れや誤字等ありましたらお許しください。

【寄付によるご支援者】
満永文 / 平野章 / 匿名 / 森田知子 / 小林整治 / 鈴木文 / 久保田満子 / 開上光代 / 匿名 / 有水さやか / 匿名 / 山本文子 / 佐野竜生 / 佐野遥生 / 宋美智恵 / 依田今日子 / 山浦襄司 / 鈴木美登里 / ｾﾝﾀｰ医師の会 / 中村佐知子 / 丹下純子 / 斉藤理恵子 / 久保田顕子 / 加藤文子 / 佐々木裕子 / 石垣真古都 / 安嶋裕美 / 鈴木ひとみ / 山野真純 / 荒川とし江 / 匿名 / 張健 / 小林整治 / 岩崎眞一郎 / 佐藤庄一郎 / 小嶋英雄・冨美子 / 齋藤睦実 / 本橋製作所 / ひまわり交通 / 相原キヨミ / 遠藤明 / 平野辰子 / 平野和之 / 和田昭彦 / 寺澤智恵子 / 大嶋博之 / 石川基子 / 花田大 / 横浜和夫 / 進藤康夫 / 鶴岡洋子 / 木戸よし江 / 安嶋裕美 / 東北醤油（株）/ 森田安彦 / 倉科紀美子 / 井上秀枝 / 嶋田希満子 / 稲野みき子 / 匿名 / 白谷弥生子 / 佐伯トシコ / 井上康子 / 井上康子 / 久保田満子 / 小林整治 / 野村愛 / 志村文江 / 榎本みさを / 須之内浩 / 張健 / 成田則子 / 柳原隆夫 / 田中悟朗 / ㈱ザンゴジャパン / 松永朱美 / 武内大佳 / 飯田芳人 / 安嶋裕美 / 羽田貞子 / 原一博 / 竹内いずみ / 張健 / 匿名 / 小林整治 / 宮治容子 / 沼沢静江 / 村田大輔 / 有本淳子 / 寺島妙子 / 高市方子 / 安嶋裕美 / 麻薙幹彦 / 満永文 / 麻薙 / 山田和代 / 横堀喜代子 / 平川篤子 / 玖村俊枝 / 張健 / うたたねの会 / 石橋裕子 / 匿名 / 小林整治 / 門田彰 / 三阿部啓子 / 神奈川胎児エコー研究会 / 安嶋裕美 / 芦澤悦子 / 須佐井信子 / 山浦襄司 / 竹内いずみ / 匿名 / 田川清 / 張健 / 儀間小夜子 / 小林整治 / 大井美嬉子 / 森晃一 / 田川いつ子 / 平野章 / 龍野淳 / 赤木和子 / 堀川浩邦 / 大倉能子 / ㈱ザンゴジャパン / 宋美智恵 / 成冨育子 / 伊澤リヨ / 関英一郎 / 森田知子 / 佐藤真希 / 志澤直樹 / 羽田貞子 / 匿名 / 小瀬村芳明 / カトリック鍛冶ヶ谷教会 / 横浜ゾンタクラブ / 張健 / 原田洋樹 / 吉田聡 / 鈴木正雄・星子 / 志村直江 / 鈴木ひろ子 / 安嶋裕美 / ハスオタカシ / 喜入久美子 / 上原妙子 / 野崎育子 / 匿名 / 白井良平 / 笹野淳・麻希子 / 石井汀 / 樋口勝久 / 森川昌子 / 関口真由美 / 大嶋博之

【よこはま夢ファンド】（横浜市が掲載を確認された方。25 年 10 月まで）
大竹裕也 / 太田弘 / 大竹裕也 / 神奈川福祉事業協会会長・伊坂重憲 / 大竹裕也 / 大竹裕也 / 石井康博 / 大竹裕也

【物品によるご支援者】
（株）柴橋商会 /（株）ザンゴジャパン / 橘孝夫 / 宮川利津子 / 佐藤隆夫 / 佐藤隆夫 / 鈴木ひとみ / 真道典子 / 草場晴美 / 中原眞由美 / 稲垣 / 松本はるか / 田中勢津子 / 黒澤宗剛 / 中山みきほ / 吉田多紀江・佳菜子 / 三石佳子 / 草場晴美 / 藤田和夫 / 工藤友子 / 天海百合子 /（株）ファンケル・横溝 / 中津川綾子 / 小荷田節子 / 白谷弥生子 / 岩田慶隆 / 松本裕子 / 大竹裕也 / 浅川冨美子 / 久保田満子 / 横山英史 / 工藤友子 / 佐藤美弥子 / 西村昭子 / 橘孝夫 / 守谷明美 / 湊裕美 / 天海百合子 / 成田さき / 花王（株）/ 柳沢京子 / 玉川政子 / 長嶋みや子 / 阿部啓子 / 飯田さち / 大江まみ子 / 中山みきほ / 倉科紀美子 / 藤巻愛弓 / 中山みきほ / 椎野 / 松澤啓之・靖子 / 伊勢屋呉服店 / 佐藤誠洋 / 山本文子 / 君和田久夫 / 森本美和子 / 工藤友子 / 乙川篤子 / 斉藤エリアネ / 宗像政子 / 伊澤リヨ / 鶴田恵彌子 / 松本裕子 / 麻生洋子 / 加藤靖子 / 菊地陽子 / 寺澤智恵子 / 上戸さち子 / 千葉ひろみ / 松澤 / 草場春美 / 大崎逸郎 / 沼沢静江 / 小木曽文枝 / 竹田こどもクリニック / 藤本敏子 / 小荷田節子 / 武和彦 / 柿崎守 / 石崎美佐子 / 鶴見孝子 / 祝明人・美香 / 港南台幼稚園 / 森田知子 / 柴橋商会 / 茶谷きよ子 / 金子ミチ代 / 久保順･琴枝 / 橘孝夫 /（株）ザンゴジャパン / 小寺春樹 / 伊藤克憲･美恵子 / 白谷弥生子 / 佐伯由美子 / 鈴木紀美 / 谷可奈子 / 千葉ひとみ / 川瀧元良 / 浜走京子 / 松川守・真美 / 大竹裕也 / 上原達也 / 東北醤油（株）/ 佐藤隆夫 / 橘孝夫 / 大塚民枝 / 平山志乃 / 宮島永太良 / 元木暁志 / 草場春美 / ホンダカーズ神奈川中（株）/ 吉田佳菜子 / 工藤友子 / 野崎育子 / 成田さき / 名和幸子 / 大河原さき / 坂倉初 / 小出 / 宮内喜代美／シャルマン

＊バザー用品等の遊休品のご提供を常時受け付けております（新品同様のお品物に限らせていただきます）。
＊嗜好品（お茶・コーヒー・紅茶等）は利用者用として歓迎します。

【その他のご支援】

＊東横商事様より、月２回食品の提供、社員の皆様による清掃作業等のご支援をいただきました。
＊リフレクソロジー（都合により休）/ 整膚マッサージは１回 / 月、タッピングタッチは２回 / 月、利用者の方に行っていただいています。
＊手作りケーキを毎月＋イベント＋αお届けいただいております。
＊セカンド・ハーベストジャパン様より、食品の寄付をいただきました。
（7/8、7/27、8/24、9/2、9/28、10/26、12/7 に、たくさんの食材をいただきました）
＊クロネコヤマト様にはご家族が帰宅する際の宅急便 46 個を均一料金にてお届けいただきました。

■リラのいえ・利用状況（2013 年７月～ 12 月）

月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
家族数	40	50	37	43	33	34
宿泊数	177	222	213	237	215	209
利用者数	360	492	397	374	368	387
稼働率	71.4%	89.5%	88.8%	95.6%	89.6%	84.3%

■きょうだい児預かり保育・利用状況（2013 年７月～ 12 月）

月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
件数	51	42	29	42	40	51
人数	61	43	30	44	45	60
預かり時間	164.5	148.5	101	135.5	109.5	182

■地域別利用者（2013 年７月～ 12 月）

北海道	青森	秋田	山形	宮城	福島	茨城	栃木	埼玉	群馬	千葉	東京	山梨	長野	新潟
1	3	5	4	6	16	8	2	1	1	8	13	8	4	2
石川	静岡	愛知	岐阜	三重	大阪	兵庫	奈良	徳島	福井	熊本	福岡	沖縄		
1	5	6	1	4	7	3	1	1	1	1	4	2		
神奈川県内	南足柄市	足柄上郡	愛甲郡	中郡	小田原市	高座郡	逗子市	座間市	厚木市	秦野市	横須賀市	三浦市	平塚市	相模原市
	3	2	1	3	15	1	5	1	5	12	6	8	8	10
大和市	茅ヶ崎市	海老名市	藤沢市	川崎市	**市内**	泉区	港北区	西区	都筑区	**海外**	オランダ	インド		
2	8	3	8	5		1	4	1	1		3	2		

＊管理・運営、近隣の清掃、保育補助に月 40 名以上のスタッフが３時間交代で活動に参加、当直者約 10 名は夜８時から翌朝９時まで、24 時間管理を行っております。
＊利用者の方や外来診察後、近隣のご支援の方、多くの活動にご参加くださっている皆様が日々、「リラのいえ」をお尋ねくださる方が多くなり、スタッフ一同大変うれしくお迎えをさせていただいております。

活動報告（2013 年 7 ～ 12 月）

7 月	10 日	シャワー室設置工事
	18 日	理事会（かながわ労働プラザにて）
	23 日	家族用駐車場整備（工事期間中こども医療センター駐車場借用～ 9 月 3 日）
8 月	2 日	横浜桐蔭大学サービスラーニング　前期学生受け入れ 3 名（8 月～ 10 月）
	3 日	バーベキュー
	10 ～ 11 日	重症心身障害児のための地域がささえるふれあいコンサート （ラポールシアター）　出演：亀渕友香＆ＶＯＪＡ　参加者：430 名
	19 日	毎日新聞東京社会事業団より、「生きる」チャリティコンサート原画寄贈 宮島永太良画伯（毎日新聞掲載）
	20 日	研修生受け入れ 2 日間（神戸芸術大学より滞在施設建築に関する卒論研究）
9 月	18 日	タッピングタッチ施術スタート　月 2 回
	20 日	理事会（かながわ県民サポートセンター）
10 月	19 日	バザー・いも煮会（30 名）　バザー売り上げ \111,330
	27 日	ハートキッズセミナーへブース参加（こども医療センター）
	29 日	理事会（こども医療センター）
11 月	2 ～ 3 日	沖縄にて JHHH ネットワーク会議 2 名参加（全国滞在施設の研修会）
	23 日	研修会開催　講師：後藤彰子先生「今子どもを取り巻く医療・保健環境は」
	26 日	研修生受け入れ（4 日間）秋田大学より卒論のため
12 月	7 日	敷地内草刈・清掃　20 名参加（株）ザンゴジャパンの社員・会員の皆様
	13 日	施設内カーテンクリーニング 20 日取り付け、全室エアコン清掃
	14 日	クリスマス会（42 名参加）馬頭琴演奏者参加（神奈川新聞掲載）
		高島中央公園イルミネーションキャンドルナイト＆コンサート協賛 2014 チャリティーコンサートチラシ配布（周知協力：みなとみらい地区マンション組合、日産マリノス、千代田化工、三菱地所、パシフィコ横浜他）
	22 日	毎日新聞東京社会事業団主催「生きる」チャリティコンサート （みなとみらい大ホール）1800 名来場 プログラムでスマイルオブキッズの活動を紹介

■その他定期会議

・月 1 回　　こども医療センター運営会議及び滞在施設運営会議（こども医療センター）
・月 2 回　　スタッフ会議（参加自由）（「リラのいえ」）
・2 カ月に 1 回　きょうだい児預かり保育会議

当ＮＰＯへの寄付金・賛助会費は、国税（所得税・法人税・相続税）以外に神奈川県・横浜市条例指定・川崎市条例指定（25 年 1 月分より）地方税（住民税）の控除対象となりました。

【支援サポートのお願い】

◇ 賛助会費として（1 口 5,000 円）
◇ 寄付として　※当団体からの領収書は寄付金控除の対象になります。

■賛助会費・寄付金のお振込先：
郵便振替口座名義：NPO 法人　スマイルオブキッズ
郵便振替口座番号：００２５０－０－１１３８１７

リラのいえ
〒 232-0066　神奈川県横浜市南区六ッ川 4 丁目 1124-2
電話・FAX：045-824-6014　e-mail：lilanoie@lilac.plala.or.jp

会報発行者：認定特定非営利活動法人 スマイルオブキッズ
http://www.smileofkids.jp/　e-mail：toiawase@smileofkids.jp

編集：㈱ユック舎　上野 真